

神奈川県ブルーリスト(昆虫)の選定について

岸 一弘

「神奈川県昆虫誌 2018」などの情報によれば、神奈川県で記録されている外来昆虫は約 80 種。

リスト選定の基準は、以下のとおりである。

- A: 外来生物法により特定外来生物に位置づけられており、県内に定着している種。
- B: 県内に定着している外来種で、生態系等への影響が比較的大きく、防除の必要がある種。
- S: 現状未侵入だが、侵入すると危険性の大きな種。

Aランクの種

1. アルゼンチンアリ

南米原産。2007 年に、横浜港に定着している。種子を加害して、農業被害を引き起こす。攻撃性が強く、他のアリ類を襲い、人家に入って人を襲う場合もある。

2. アカボシゴマダラ名義タイプ亜種

原産地は中国・朝鮮半島など。1998 年8月に、藤沢市辻堂太平台2丁目の長久保公園で発見されたのが県内初記録。2018 年に、特定外来生物に指定された。

本種と同様に幼虫がエノキの葉を食べるゴマダラチョウ、テングチョウなどの蝶類と競合する可能性がある。

3. セイヨウオオマルハナバチ

ヨーロッパ原産で、1991 年に導入された。交雑による在来種の不妊化を引き起こす。長い花に穴を開ける盗蜜を行うため、植物の種子生産量を低下させる。県内で局所的に記録されているが、定着は？

Bランクの種

1. ヒロヘリアオイラガ

南アジア・東南アジア原産。2000 年に横須賀市で発見されたのが、県内初記録。

イラガなどと同様に幼虫の棘に毒があり、触れると強い痛みを伴う皮膚炎を起こす。幼虫はさまざまな広葉樹の葉を食べ、生垣に使用されるレッドロビンでもよく発生するので、被害が生じやすい。

2. ムネアカハラビロカマキリ

中国原産。2006 年に秦野市葛葉緑地で発見されたのが県内初記録である。ムネアカハラビロカマキリが進入すると、在来のハラビロカマキリが見られなくなってしまうという報告も見られる。

3. ヤノネカイガラムシ

中国南部原産。1964 年に、小田原市根府川で記録された。柑橘類を吸汁し、商品価値の低下を引き起こす。生息密度が高くなると、木が枯死することもある。

4. オンシツコナジラミ

北米原産。1974 年に川崎市のトマトで記録されたのが県内初。本種の寄生でスス病菌が繁殖し、それに伴う作物の生育不良、ススによる汚染果の発生が起きる。

5. ミカンキイロアザミウマ

北米原産。2015 年に、平塚市のトマトへの発生が確認された。吸汁されると、果実の品質低下が起きる。植物ウイルス病を媒介する。

6. ミナミキイロアザミウマ

東南アジア原産。1984 年に大磯町のキュウリで発生が確認されたのが県内初。吸汁された花卉・野菜等の品質低下。植物ウイルス病の媒介。

7. イネミズゾウムシ

北米原産。イネの害虫で、幼虫による根の食害が主。単為生殖。1976 年に愛知県知多半島で国内初の記録が得られた。県内では、1980 年代前半に記録されている。

8. ブタクサハムシ

北米原産。1996 年に千葉市で発見されたのが国内初記録であるが、同じ年に神奈川県でも記録された。オオブタクサ、オオオナモミなどで発生するが、ヒマワリも食害する。

9. フラーバラゾウムシ

中南米原産。1994 年に埼玉県、神奈川県で初めて記録された。多くの園芸作物の葉を食害する。

10. アルファルファタコゾウムシ

ヨーロッパ原産。マメ科を食害する(神奈川ではヤハズエンドウが主)。2001 年に、横須賀市馬堀海岸で記録されたのが県内初記録。その後、県内各地に分布を拡大している。

11. ヤシオオオサゾウムシ

東南アジア原産。カナリーヤシなどのヤシ類を食害し、ヤシ立枯病を媒介する。被害が大きいと、枯死する場合もある。県内では、2007 年 12 月に横須賀市馬堀海岸で多数記録された。

12. スイセンハナアブ

ヨーロッパ原産。1953 年に神奈川県で発見されたのが国内初とされる。幼虫はスイセンの球根を食害する。

13. アオマツムシ

中国南部原産と推定される。モモ、ナシ、カキなどの果実を食害する。多数の鳴き声は“騒音”とも言える。

14. ホソオチョウ

韓国原産。国内定着の原因は、“放蝶ゲリラ”による人為的な放蝶と考えられている。1980 年に旧藤野町で記録されたのが、県内初記録(現在も生息)。本種と同様にウマノスズクサの葉を食べるジャコウアゲハの幼虫と競合する可能性がある。

15. アメリカシロヒトリ

米国原産。さまざまな樹種の葉を食害する。県内で初めて発生が確認されたのは 1948 年ごろ、横浜市においてである。

Sランクの種

1. アカヒアリ(ヒアリ)

南米原産。国内で記録されている個体は、中国から移入されたものと考えられている。神奈川県では、2017 年 7 月には横浜港・大黒埠頭のコンテナヤード内で初めて発見され、2019 年 7 月には横浜港・山下埠頭のコンテナ内で 1,200 個体以上見つかった。刺されても死ぬことは稀であるが、痛み・かゆみ等の軽度の症状や、体質によりアレルギー反応やじんましんが出る。

懸命な水際防除が行われているが、東京港では定着した可能性が高く、横浜港でも定着の危険性が高まっている。

2. クビアカツヤカミキリ

中国原産。愛知県(2012 年)、埼玉県(2013 年)群馬県、東京都、大阪府、徳島県(2015 年)、栃木県(2016 年)で侵入が確認されている。

発生すると、サクラ、ウメ、カキ、モモ、ポプラなどの樹木を衰弱させ、枯死の原因となる。

神奈川県外来生物 鳥類について

鈴木茂也

■鳥類移入の特徴

○殆どが人為的に持ち込まれる

- | | |
|-----------------|-----------------------------|
| ① ペットとして（家庭で愛玩） | ホンセイインコ・ガビチョウ・ハッカチョウ・ベニスズメ等 |
| ② 公園・動物園で飼育 | コブハクチョウ・サカツラガン等 |
| ③ 家禽として（食材） | アヒル・シナガチョウ等（品種改良されたものが多い） |
| ④ 狩猟用として | コジュケイ等 |

※植物のように混入して持ち込まれることはない。（輸入禁止にすれば防ぐことができる）

○稀に国外の港で船に迷い込んだものが運ばれる。

カササギ・タカサゴモズ等

※野生で渡来したものとの区別が難しい。

■外来種の消長

- ①一代限り 逸出した個体が単独で野外で見られ、一代で絶える種。
- ②一時的 逸出した複数の個体が繁殖して一時的に増加するが、定着しない種。
- ③定着 繁殖した個体が増加し、分布を広げて行く種。

■外来種の脅威

- ①在来種との交雑
- ②生態系の攪乱
- ③農産物・生活への被害

■外来種が及ぼす生態系攪乱

- 競合による在来種の減少
- 被捕食者として捕食者（主にタカ類＝オオタカ）の個体数増加

■神奈川県における要注意外来種

○ホンセイインコ

インド・スリランカに分布する亜種ワカケホンセイインコ。

樹洞営巣性・集団性で在来種との営巣場所の競合が考えられる。

影響が大きい在来種はムクドリ・アオバズク（神奈川県内では希少種）

○ガビチョウ（特定外来生物）

中国南部などに分布し、中国では広く飼育されている種。

神奈川県内では 1995 年に藤野町で初めて記録されたが、現在では丹沢や箱根も含め県内全域に分布を広げている。大きな声で囀り、聴覚的な野外景観を著しく損なう。三浦半島の里山にも個体数が増大し、今後生態系に及ぼす影響が大きいと思われる。県北などでは近縁種のカオグロガビチョウも生息している。

○ソウシチョウ（特定外来生物）

状況はガビチョウに似ているが、丹沢・箱根など高標高域に多い傾向がある。

全国の山地で増加している。



図1. さえずるガビチョウ

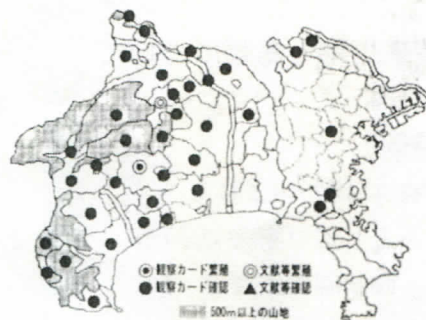


図2. 2005 年のガビチョウ分布図(現在は全域)

○ハッカチョウ

横浜市港南区を中心に磯子区・保土ヶ谷区・戸塚区等の市街地に分布し、生息域を拡大しつつある。

○コジュケイ

およそ 100 年前に狩猟鳥として輸入され、横浜市等で放鳥され全国的に増加・定着した。

主として里山の樹林で地上生活し、雑食性。フクロウ・ノスリ等に捕食され、生態系地位を確立している様子がうかがわれる。競合が推測されるキジ・ヤマドリへの影響は今となっては判断し難い。

○ドバト

ユーラシア大陸に広く分布するカワラバトを原種として様々な品種改良が行われてきたもの。

市街地に多いが、里山環境にも採食場所として侵入してくる。営巣場所は人工建造物（ビル・歩道橋・トンネル）が多いが、海岸の海蝕洞も使用する。

人為的な餌付けも根深く、個体数が多い。オオタカやハヤブサの主要な食物となり、生態系のバランスを崩していると思われる。増加したオオタカに営巣地で遭遇するサシバやミゾゴイ等の希少種が捕食される可能性がある。



図3. 野外に多く生息するドバト



図4. ドバトも捕食して増えたオオタカ



図5. オオタカに捕食されたとと思われるサシバの羽根

○アヒル

中国でマガモから家禽化されたもので、種としてはマガモと同一。一般家庭で雛から飼育され大きくなって公園などの池に放たれるケースが多い。野生のマガモとも交雑しアイガモ（合鴨）となり、何代も交雑が繰り返される。

神奈川県内では野生のマガモは繁殖していないが、カルガモ（遺伝子の配列はマガモとほぼ同じ）との交雑が見られ、繰り返される。